

# The Kamenori Community かめのりコミュニティ

公益財団法人 かめのり財団は、日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて、  
未来にわたって各国との友好関係と相互理解を促進するとともに、  
その架け橋となるグローバル・リーダーの育成を目的に事業を行っています。

 公益財団法人  
**かめのり財団**  
Kamenori The Kamenori Foundation

## 中学生交流プログラム



日本の中学生が水上警察船の座礁した様子について学習



タイの中学生が日本文化体験として弓道に挑戦

2016年3月 No.21

## 今号の内容

- ◇ かめのりフォーラム 2016  
ゲストスピーチ  
体験発表  
かめのりセッション  
第9回かめのり賞表彰式
- ◇ 第7回中学生交流プログラム（派遣／受入）
- ◇ 高校生交換留学プログラム
- ◇ 高校生短期交流プログラム
- ◇ かめのりコミュニティ仲間からの便り（特集号）

## かめのりフォーラム 2016 開催

### 中学生から大学院生までの奨学生、関係者が一堂に集い開催

2016年1月8日（金）「かめのりフォーラム 2016」をアルカディア市ヶ谷（東京都千代田区）にて開催いたしました。今年は約150名の関係者と弊財団が支援する交流プログラムに参加した中高生や大学院奨学生（以下、奨学生）が一堂に集い、第一部では第9回かめのり賞表彰式、奨学生による体験発表、そしてゲストスピーチが行われ、出席者はゲストや奨学生の話を耳を傾けました。第二部は、会食を交えての交流会で、奨学生

全員からの自己紹介と与えられたトピックについてひとことずつ発表もあり、時に感嘆の声や笑いも起こる和やかな雰囲気の中、関係者と奨学生との温かな交流の時間となりました。

翌9日（土）は、奨学生それぞれが体験を振り返る「かめのりセッション」を行いました。短い時間の中で、奨学生同士の仲が更に深まり、新たな友情も生まれました。



詳細は次ページにてご紹介します。

## かめのりフォーラム 2016

第一部は、来賓の独立行政法人国際交流基金の櫻井友行理事より「2013年に共催事業である『にほんご人フォーラム』という新しい試みが始まった。引き続き、かめのり財団と長期的な連携をしていきたい」とお言葉をいただき、その後、かめのり賞受賞8団体へ正賞の楯と副賞の活動奨励金の贈呈を行いました。「活動奨励金の使い道は？」の質問に対して、受賞団体の方々からは「海外で配布している算数ドリルの印刷代に充てたい」「今まで積み重ねてきた交流活動の成果をまとめ、出版したい」と事業費の確保が各団体にとっての最大のテーマであること、また、今後の事業を更に良くしたいという熱い思いを話していただきました。第二部では、公益財団法人AFS日本協会の小川郷太郎副理事長の乾杯のご発声で宴の幕が開き、関係者や奨学生を含む、様々な年代や国籍の出席者が交流できる場となりました。



来賓挨拶  
(独)国際交流基金  
理事 櫻井 友行氏



### ゲストスピーチ

#### これからの宇宙探査について～火星に人は住めるか～

国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構 名誉教授  
上杉 邦憲 氏

1962年、ケネディ大統領がアポロ計画演説を行い、それからわずか7年後に人類は月に行く。ケネディ大統領は演説の中で「容易だからではなく、むしろ困難だからこそ挑戦する」と主張し、宇宙に足を踏み入れようとしていた私たちに鼓舞した。

しかしながらその後、全ての惑星、いわゆる水金地火木土天海冥の星に探査機がたどり着き、それらは全て『無人』探査機で行われてきた中、『有人』探査をする意義に疑問を持つだろう。しかし、地球外の惑星に住むということになると、まずは『有人』での宇宙探査は必須になるのだ。

これからの人口の増加にともない、地球上での水・食糧・エネルギー不足に直面することが問題となっている。また2009年のNASAの公聴会では「人類の文明を地球外に広める。その始まりが火星だ」と提案された。しかし、

火星がどんなところで、住む事が現実的であるのか、知っている人はいるだろうか。

火星は空気がほとんどなく、大気圧は地球の1/100、温度は零下数十度で、水は地下にわずかあるかないか。重力は地球の1/3で、磁場がほとんどないため、強力な放射線が降りそそぐ。地球周辺の宇宙では、人が通常地球上で1年間に浴びる放射線である1ミリシーベルトを1日で浴びてしまう。人は5,000ミリシーベルト浴びると下痢や出血、10,000ミリシーベルトで意識障害、50,000ミリシーベルトで死に至る。地球から火星まで行って帰ってくるだけで約3年は必要で、その間に浴びる放射線は約2,000ミリシーベルトになる。つまり、火星に住むことは出来ないのだ。火星を緑化して地球に似た環境にしたとしても、放射線の問題で結果的に地下に住むしかない。放射線を避けて火星に住んだとしても、重力の関係で

火星に住んでいると身体が変形し、2世代以降の子孫は地球に帰ることができなくなり、本当の『火星』になるしかなくなるのだ。

そのような状況の中、私はこれからの『有人』宇宙開発の目的は『友人』宇宙開発となるべきだと考えている。人はレジャーとして宇宙に建設されたホテルに滞在し、そこでは無重力の中、鳥のように飛んだりできる。そんな楽しめることに宇宙を使いたい。ただし、そこで働くのは放射線の関係で長く滞在できない人間ではなく、人型ロボットになるだろう。

実際に、一般客を乗せて宇宙を往来するための準備が進められている。ニューメキシコの砂漠には格納庫や滑走路などを備えた宇宙港が建設され、宇宙への旅に予約をしている人が世界中で既に750人もいる。世界でも同様の事業が民間人の手によって進められ、近い将来現実となるのだ。

現在、私自身も北海道にスペースポートを作る計画を考えている。



第二部では奨学生が自己紹介と与えられたトピックについて発表

## 体験発表

今年の体験発表では中学生、高校生、大学院生、それぞれの代表3名が発表しました。中学生交流プログラムでタイを訪問した中学生は「タイ人は親日家だとは聞いていたが、想像以上に優しく、日本に興味がある人が多かった。プーケットの津波がどれほど凄かったのかを肌で感じた。その苦しみも、克服した努力も、そして同時に感じた心の豊かさも、目で見たものをたくさんの人に伝えていきたい」と、今後の目標を語ってくれました。また、マレーシアで開催された『にほんご人フォーラム2015』に参加した高校生は「一番衝撃的だったことは、一緒に参加したASEAN5か国の生徒たちはとても日本を愛し、僕らよりも日本の伝統文化を知っていた。僕たちが日本語や日本をもっと大切に、日本という無限の可能性をもっと発信しなければいけない」と、プログラムで学んだ彼にできる役割を語ってくれました。大学院奨学生からは「奨学生に採用され、研究に集中して取り組むことができようになっただけではなく、異なる研究分野であっても熱く議論し切磋琢磨できる家族と呼べる仲間と出会ったことが一番の喜びだ」と、発表がありました。



ゲストスピーチや体験発表に興味深く耳を傾ける関係者



## かめのりセッション

翌1月9日(土)には、奨学生が参加プログラムごとに分かれ、お互いの体験を振り返りました。高校生長期受入生が日本滞在中一番苦労したことは学校生活であったと口をそろえて話し「最初は真面目でシャイな日本人生徒と友達になることが難しかったけれど、日本語も上達し、本当はシャイではない日本人と仲良くなる方法を学んだ。今はとても仲良く、別れたくない」と、話してくれました。高校生短期派遣生は「相手に伝えるということがどれほど難しいのか、本当のコミュニケーションが何かを学んだ。自ら歩み寄り、お互いの違いを認め合うことが重要だ」と、初めて行った海外での気づきを話してくれました。そして、カンボジアスタディツアー参加者は「カンボジアに訪問する前は正直偏見を持っていた。目で見て体験することがどれだけ重要なことか痛感した」と、自ら体験することの大切さを語り、中学生は「家族と離れて生活したことによって、今まで支えてくれていた家族のありがたみを知ることができた」と、体験による自らの心境の変化を語ってくれました。

最後に、留学の先輩である大学院生のパネルディスカッションでは、中高生へのメッセージとして「物事は違う角度で見ると見方が変わるように、答えは決して1つだけではない。相手を受け入れ、思いやる気持ちを忘れないでほしい。さらに、興味のある事にはどんどん挑戦しよう!」と、大学院生がエールを送りました。

来賓挨拶  
(公財) AFS 日本協会  
副理事長 小川 郷太郎 氏



かめのりセッションで、参加者同士の話し合いにより自分達の体験を振り返る

## 第9回かめのり賞表彰式

選考委員会にて、8つの団体の授賞が決定し、正賞の楯と副賞の活動奨励金を贈呈しました。

選考にあたり、高く評価された点は次のとおりです。

- ① これまでの活動歴、活動内容とその成果として、活動によりもたらされた変化や影響力が大きく、また、活動自体に自主性、独自性を持ち、他にない取組みをしていること
- ② 地域やボランティアの人々と共に活動し、また、行政、企業、教育機関および他団体等と密接に結びついて、有機的な協働・連携が進められていること
- ③ その活動が社会の必要性に合致し、将来を見据えた事業展開を考えていること

これらの点に加え、アジアを中心とした活動や青少年を主眼とした交流や人材育成であるか、また支援する側と支援先が直接交流する活動をしているかという点にも着目し、選考しました。



記念の楯と活動奨励金を康本健守評議員より贈呈



宮嶋泰子評議員から受賞者にインタビュー

### 第9回かめのり賞 表彰者(敬称略)

昨年の表彰者の活動報告も展示



#### 特定非営利活動法人 国際地雷処理・地域復興支援の会



カンボジア・バタンバン州を中心に、地雷処理活動を通して、村人の安全で自立可能な地域復興を支援するとともに、現地における学校運営やインフラ整備の人材育成にも大きく貢献。

#### 川崎・富川高校生フォーラム・ハナ実行委員会



「アジア市民になるう」をキャッチフレーズに、日本と韓国の高校生が共同体験・学習・生活を通じて相互理解と友好関係を醸成し、様々なアジアの問題をともに考えることで多文化共生社会の形成に多大な貢献。

#### 公益財団法人 国際センター



メコン川流域の恵まれない子供たちに奨学金を提供し基礎教育支援をするほか、ラオスでは39校の学校建設をするなど、より多くの子どもたちが教育を受けられるよう、市民の力による教育環境の整備に多大な貢献。

#### 認定NPO法人 IVY



山形を中心とした東北各地のユースメンバーが、カンボジアの小学生のために算数ドリルを作成し贈呈する教育支援や、日本での地球子供キャンプの活動を通し、カンボジアとの交流と相互理解に多大な貢献。

#### 特定非営利活動法人 在日外国人教育生活相談センター信愛塾



在日外国人を対象にした教育・生活・人権に関する生活相談や、外国人の子供たちの「居場所」づくりなど、長年、地域の外国人住民の課題解決に伴走型「支援」をすることにより、多文化共生の推進に大きく貢献。

#### 特定非営利活動法人 APLA



フィリピン・ネグロス島での研修農場の運営支援、農業の技術提供など、経験を分かち合い、協働する場を創り出し交流することによって、アジアでの地域自立と人材育成に大きく貢献。

#### 認定特定非営利活動法人 国境なき子どもたち(KnK)



日本と世界の子どもたちが「共に成長する」ことを理念に、日本の青少年がアジアの子どもたちの課題を取材し、現地で交流する「友情のレポーター」事業を通じて、国際理解の推進に多大な貢献。

#### りてらこや新潟



新潟市を中心に、教科書の翻訳やルビ付けの学習サポート、日本語学習教材の作成など、外国から来た子どものための市民のリテラシー向上を通して、多文化共生社会のために大きく貢献。

## 第7回中学生交流プログラム

2015年度の中学生交流プログラムは(公財)AFS日本協会により、タイ王国との間で実施されました。2015年10月4日(日)から13日(火)の10日間はタイの中学生が日本に、10月31日(土)から11月8日(日)の9日間は日本の中学生がタイを訪問しました。今回の交流プログラムでは、テーマ型学習を取り入れ、両国の被災地を訪問。タイの中学生は福島を、日本の中学生はプーケットを訪れ、互いに津波について学びました。

### 派遣：日本の中学生がタイへ

(公財)AFS日本協会は高校生留学を主とした国際教育交流団体ですが、今回AFSタイ事務所と協働して初めて中学生交流プログラムを実施させていただきました。プーケットでは、2004年のスマトラ沖地震で海岸から2km先まで座礁した水上警察船の現場や津波メモリアルパークを訪問しました。また、プーケット日本人会を訪問し、会長より震災当時の様子やその後の暮らしについて話を伺うと同時に東日本大震災で被災した福島出身の派遣団員へお見舞いの言葉を頂き、自然災害の恐ろしさや命の尊さを再認識しました。学校交流ではバンコクとプーケット2つの学校を訪問して事前研修で準備してきた日本文化O×クイズやタイの歌を披露して大いに盛り上がりました。また、バンコクでは2泊3日のホームステイをして、家族の一員として迎え入れられ、タイの人たち

の生活を体験することができ有意義な滞在ができました。羽田空港での解団式で、「プーケットでは津波の存在を知らず多くの方が犠牲になったことを学んだ。自然災害の恐ろしさや事前対策の大切さを家族や学校の友達に伝えたい」、「辛い料理には慣れなかったが予想外にも虫が美味しかった」など各々の感想や今後の取り組みを皆と共有しました。教科書では学べない「生」の交流を通して、最初消極的だった派遣団も元気いっぱいのタイ人に感化されて積極的になり、中学生は異文化理解の吸収が早く、異文化交流で得る効果は大きいと感じました。派遣団が得た経験を今後の糧にして、学生生活や将来に活かしていただきたいと願っています。

公益財団法人AFS日本協会 大工原 奈津美

ホストファミリー・学校関係者とのフェアウェルパーティ



ムエタイに挑戦!

### 受入：タイの中学生が日本へ

あの東日本大震災から、はや5年目の春。震災当時はAFSの活動も危ぶまれていたもののように支部活動にも動きが出始めたころに中学生交流プログラム受入のお話がありました。被災地訪問として福島にぜひ、タイの中学生を訪問させたい、というお話で更に支部活動に元気が出てきました。

タイの中学生は10月7日(水)に郡山市に到着。「中学生は元気だね～」という支部スタッフの声を背にホストファミリーのもとへ。

2日目は会津学鳳中学校での交流会。「タイの中学生も福島県の中学生もなかなかやるものだなあ～」と感心し、交流会の後は茶道、赤べこの絵付け、弓道などの日本文化の体験学習を行いました。それぞれに絵付けをした赤べこは日本のお土産としてタイの家に飾られていることと思います。3日目は「ふくしま学びのネットワーク」を立ち上げて被災地の

高校生の学習サポートにご尽力されている前川直哉先生の案内のもと、南相馬市を訪問しました。伝承鎮魂祈念館で当時の津波の様子をDVDで観ながらタイの中学生も胸に迫る思いがあったようでした。また、一部避難地域になっているひと気のない街並みを見て福島県の痛みを感じたのではないかと思います。そのあと県立福島高校のスーパーサイエンス部を訪問。全国の高校に協力を得て福島



慰霊碑の前で手を合わせ犠牲者を悼む

市の放射能の値との違いを調べ、少しでも福島県の風評被害を払拭する働きかけをする若い力に私達大人が感動すら覚えたものです。無事日程を終えた時に「高校生になったら日本に留学したい」というタイの中学生の言葉が少しばかりの疲れを心地よいものにしてくれました。

公益財団法人AFS日本協会福島支部 近内 成子



学校交流にて福島県立会津学鳳中学校を訪問

## 高校生交換留学プログラム

### 大変だったけど、「いい人」になれた：長期留学生帰国

昨年3月に来日したアジアからの受入生が、本年の2月初めに無事帰国しました。帰国前に行われた懇談会では、来日時とは見違えるように上達した日本語で、日本での体験、留学で得たことやこれからの目標を発表してくれました。「日本と韓国は近い国だけど違う。これからもいろんな国を見て世界的な視野を持てるようになりたい」「日本語がとても好きになった。日本語の学校を自分の町に作って他の人に日本の素敵なおとこを伝えたい」「留学前はできなかった洗濯も掃除も何でも自分のできるようになった」「来る前は自分のことしか考えられなかった。今は大人になって人のことを考えられるようになった。「いい人」になったと思う」「大学でも留学をしたい。将来はメディアの仕事について日本

のことを伝える仕事をしたい」「まわりの人が助けてくれた。助けてくれた人たちに本当に感謝したい」と、話してくれました。留学生活でたくさんの楽しい思い出と同時に、様々な困難を乗り越えた経験を振り返り、少し大人になった彼らは満面の笑みで帰国の途につきました。



夏に実施したかめのりスクールの様子

### かめのり地球青少年サミット 2016 [KEYS 2016]



2016年2月11日(木)～2月14日(日)の4日間にわたり、日本の大学生と、アジアの国々の大学生たちが集まり、アジア全体で解決しなければならない課題を分析し、解決策を議論する会議「かめのり地球青少年サミット2016 [KEYS 2016]」が実施されました。

今回は香港中文大学、フィリピンのデ・ラ・サール大学の学生が参加しました。また、同大学の教授を講師としてお迎えし、基調講演および講義を行っていただきました。最終日に会議の参加学生による研究成果発表会が行われました。詳細は次号(22号)のかめのりコミュニティにてお伝えする予定です。

## 高校生短期交流プログラム

### 日本を体験したい！友達をたくさんつくりたい！－中国・韓国から高校生来日

本年1月に、韓国と中国から各5名、計10名の受入生が(公財)YFU日本国際交流財団の短期受入プログラムで来日しました。来日時には「日本の文化を体験して、韓国の文化を教えたい」「友達をたくさん作って、日本語がうまくなりたい」「将来シェフになりたいので、日本料理を覚えたいし、韓国料理を作りたい」と、それぞれの想いや意気込みを語ってくれました。約1ヶ月の間、ホストファミリーと共に生活をしながら、日本の高校に

通うことで授業や部活動を体験しました。

このプログラムでは、日本の家族、同世代と交流し、文化や日本語のみならず、生活様式、習慣を体験することを通じて、自分の国との違いを考えながら交流することの楽しさを実感してもらいたいと思っています。国と国との関係では緊張感もある昨今、自分達が感じた「日本」について、帰国後、周りにいる多くの人に伝えると同時に、日本で作ったつながりを今後も継続してもらいたいことを期待しています。



#### 今後の予定

- 3月 【高校生長期】第10期受入生来日
- 4月 大学院留学アジア奨学生 新奨学生証書授与式・交流会  
王敏理事 講演会開催団体募集開始  
(募集詳細はホームページにて発表いたします。)

#### 《編集後記》

文化や習慣の違いで戸惑い、夏には「大変だ」と口を揃えて言っていた受入生が、いくつもの壁を乗り越え、最後には支えてくれた周りの人々への感謝の思いを述べると共に、彼ら自身も自分自身の成長を感じて帰国した。この彼らの変化をうれしく思うと同時に、この想いを忘れず、これからの人生を歩んで欲しい。そして、日本とのつながりを持ち続けてもらいたい。(松本)

発行人 / 西田 浩子 編集 / 松本 龍一  
デザイン / イワブチサトシ (BUTI design) 印刷 / 佐伯印刷株式会社



日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します！

公益財団法人 **かめのり財団** The Kamenori Foundation

〒102-0083 東京都千代田区麹町 5-5 共立麹町ビル 103

TEL : 03-3234-1694 FAX : 03-3234-1603

E-mail : info@kamenori.jp URL : http://www.kamenori.jp/